

【第7回松本市基幹博物館建設検討委員会展示専門部会 発言録】

(敬称略)

開催日時 平成30年12月12日(水) 午後1時30分から午後4時45分まで

場 所 松本市立博物館2階講堂

出席者 松本市基幹博物館建設検討委員会展示専門部会

菊池健策委員、後藤芳孝専門員、桜井多美江専門員、関悟志専門員、
原明芳専門員

乃村工藝社(設計JV)

亀山氏

事務局(松本市立博物館)

木下館長、中原課長、船坂課長補佐、三木主査、千賀主任、岡野囑託

1 部会長あいさつ

菊池：こんにちは。本日は寒い中ご苦労さまです。今日の委員会が展示に関して我々の意見を反映させることのできる最後の機会ということですので、2月の実施設計の完成を前に、ぜひ忌憚のない意見をお聞かせいただければと思います。よろしくお願いいたします。

2 議題(1)

事務局：(パブリックコメントの実施結果についての説明)

菊池：ありがとうございました。ただいま担当者からパブリックコメントについて説明がありました。ご質問等がありましたらお願いいたします。

ございませんか。それでは、私の方から1つ、9ページのNo.43ですが、収蔵庫の問題で「念には念を入れて欲しい」という意見がありましたけれども、これはその通りだと思います。中越地震の際も十日町博物館へひと月後に見にいったんですが、収蔵スペースが2つありました。片方の建物は斜めになって、もう片方はまったく何も被害を受けていませんでした。斜めになった建物の方は既存の収蔵庫で耐震機能が十分ではなかったらしく、もう一方の収蔵庫は国指定の文化財を入れるため耐震設計をして作られた収蔵庫だったので、とてもしっかりとしていました。収蔵庫というのは大切な資料を保管しておくところですから博物館にとって一番大切なところだと言っていいかもしれません。なのでそれをきちんと作る。

そして、そのときに自家発電の装置を付けて欲しいです。十日町博物館のときは、博物館の職員が地震発生後に駆けつけたらしいですが、中に入って作業を続けられなかったそうです。というのは何かあると電源が落ちて窓やドアが全部閉まる構造になっていたそうです。中から電気

で動かすことができないので、中に閉じこめられると逃げられないですから揺れるたびに外へ避難したそうです。ということがあったので「念には念を入れる」ということはその通りのご意見ではないかと思えます。

中原：今回は免震ではないですが耐震で対応しているということですがけれども、収蔵庫についてはお金をかけて対応していきたいと思っていますし、いまお話がありました自家発電設備につきましても、今回は対応しようとしておりますので念には念を入れて対応していきたいと思っています。

菊池：たぶんその方がいいと思います。

それから、再確認ですが9ページのNo.44に水一湧水の問題で「ポケットパークについては云々・・・」と書いてありますが、これは博物館の場合基本的には水が多いというのは考え事ではあるわけです。資料管理との調整の兼ねいで、湿度を供給するものが目立ち過ぎるのもどうかと思います。

中原：設計案の2ページに少し小さいですけどもポケットパークが点線で囲ってある2カ所ございますけれども、右側のポケットパークにつきましては、現在井戸がございまして、それを活用して水景のことを考えています。左側のポケットパークについては、まだしっかりと詳細詰めておりませんが、この辺にも自噴の井戸があったりしてございまして、それを活用するのかどうかを含めて、少し水回りが欲しいかということで検討しております。

菊池：たぶん、来館者にとっては欲しいですよ。

後藤：市のパブリックコメントでは、どういう方がコメントして下さっているのか。例えば、これまでいろんなことをやって皆さんが案内したりしたのに参加した人たちなのか、あるいは地区的には周辺部の人たちが多かったのか、その辺はどうでしょうか。

中原：氏名と性別は把握しておりますが地区や年齢までは把握しておりません。印象としては館に関わる方が比較的に多いです。

後藤：いままでの説明を聞いてきた中で、そういう風な意見を寄せられたということになればとてもいいことだと思うんですが、「施設の場所を初めから見直す」という意見もあったりして、そういうことも理解されていないということもあるのかなと思ったりします。

中原：「いまさらながら」というご意見もあるんですが、こういう意見はどこでも出るのかなと思ってございまして、いままでもこちらの方々にはきちんと説明してきているんですが、やはりしっかりと納得していただけない部分もまだあるというのが実情です。

菊池：寄せられたパブリックコメントは年齢だとかどういう人なのかということ把握することは可能なんですか。

事務局：年齢は記載欄がないので調べる手段はありません。氏名を書いていた

きますので氏名を見て、例えば、これまでワークショップに参加していただいた方だとか、これまで博物館と関わりの事業に参加された方ということは把握することはできます。集計した印象としては、これまでのワークショップに参加された方だとか博物館の中の関わりのある方々が半分まではいかないですが、かなり寄せられたという印象があります。

その一方で、住所を見ますと旧松本市にお住まいの方が多く、逆に合併地区にお住まいの方でコメント下さった方というのが比べてみると、かなり少ない印象です。

菊 池：ありがとうございます。それでは、パブリックコメントについては反映できるものは反映し、ダメなものはきちんと説明できるように取組んでいただければと思いますので、よろしくをお願いします。

それでは、続きまして「展示設計の検討状況について」に入りたいと思います。事務局から説明願います。

議題(2)

事務局：(展示設計の検討状況についての説明)

菊 池：パブリックコメントを踏まえて設計を変更した部分を中心に説明がございましたが、ご質問・ご意見がありましたらお願いいたします。

櫻 井：「子ども向け展示室」の横にある多目的トイレ・授乳スペースは「子ども向け展示室」から直接行けますか？

事務局：授乳スペースは直接行けます。その上にある多目的トイレは「子ども向け展示室」から一旦出ます。

櫻 井：そうすると、子どもさんが遊んでいてトイレに行きたいとなったら、外に出てグルッと回っていかないと。

事務局：そうですね。1回靴を履いて出ていかないと。

櫻 井：直接出入りするの難しいですかね。

事務局：1つしか入口を設けていないのは「この常駐職員の監視の目の届くところに入口を」という設計でこうなっています。

菊 池：子どもって夢中になるとギリギリまで我慢して間に合わなくなることもあると思うんですが。

櫻 井：一度外に出てというのは使い勝手としてどうなのかなとは思いますが。

後 藤：向かい側のWCは子ども用の便器も据えますか？

中 原：それも含めて検討します。

菊 池：「子ども向け展示室」から西側にある「授乳室と多目的トイレ」はまっすぐに入ることは考えられないですか？

中 原：利用が「子ども向け展示室」に限られてしまうのは、どうなのかというのが大きいかなと。

菊 池：いまの入り方と、直接入ると出入口を2つに分けるわけにはいかない

でしょうか。

中原：何となくわかります。そこも含めて本当にできるのか、片方開けたときにはもう一方開けられないということになるかと思imasるので、その辺が可能なのかと。たぶん片方はロックが掛からなければいけないと思imasるので検討いたします。

菊池：ほかにありますか。

後藤：資料が見たいときにはどこに行けばいいですか？

事務局：先ほどの「多目的トイレ」の左に「熟覧室」を設けております。こちらに来ていただいて学芸員が資料を持ってきて、この部屋で見させていただくということを想定しています。

後藤：広さはどれくらいありますか？

中原：至急確認します。

後藤：ここは自由に使えるということですか、それとも、お金を払わなければいけないような資料を見る人がここに入るんですか？

事務局：こちらは事前に申請していただき、収蔵資料をここに運び出して見させていただくというような部屋になります。ですので、どちらかというとも自由に使うというよりは、職員が立ち合って資料を出して見させていただく部屋です。

後藤：突然来て資料を見たいということも結構あると思うんですが、それは対応しないですか。

事務局：いまの博物館のルールでも展示していない資料については、事前に関覧の申請をしていただいitてご覧いただくということになっています。

後藤：はい、わかりました。

菊池：「熟覧室」での資料閲覧は職員が立ち合って話をしてくれますか？

事務局：はい。

菊池：この部屋で写真撮影やコピーはできるようになりますか。それとも部屋から持ち出して事務室で作業するのか、どっちを考えているんでしょうか。

事務局：いまはここにコピー機を置く想定はありませんでした。テーブルは置きますので、そこで広げてその方が持参したカメラで写真を撮ることは可能です。

菊池：原先生、何かご意見ありますか。

原：作業スペースはどこになりますか。

事務局：はい。そこは狭いところでして、2階・3階の「特別展示室」「常設展示室」それぞれ上に「展示準備室」という部屋を設けています。ここでパネル等を準備して展示の期間になったところで、ここから運び込むということを想定しています。

原：大変だと思うので、そこは機能的に動けるように充実しておいた方がいい

いと思います。

中原：「熟覧室」は約8㎡ですので4畳半ぐらいだと思います。

後藤：4畳半だと1人で大きな資料を広げたら一杯になっちゃう。どのくらいここで作業するのか分からないけど、3人ぐらい入った場合、作業を制限しなくちゃいけなくなります。

事務局：ここで見きれないような大きい資料であれば、会議室等も使って職員も立ち会ってすることも想定していかなければいけないと考えています。

菊池：使うのはどの会議室になるんでしょうか。

事務局：「会議室2」になると思います。なるべくパブリックエリアと重ならないようなところでという風には思っています。

菊池：そこはミニキッチンが付いている？水と火は大丈夫ですか。

事務局：ないです。大丈夫です。

菊池：ほかに何かありますでしょうか。平面図についてはこれでよろしいでしょうか。

事務局：(ウィンドーギャラリー展示についての説明)

菊池：ただいま説明がありましたが、ご意見ありましたらお願いいたします。

関：壁面の展示の高さが2mほどということで、見やすさということで考えると2mは低くはないと思うんですが、ものの量や質感とか迫力を出すということであれば、それくらいビッチリとあっても構わないのかなとイメージ的には思ったりしますが。ここに入るのは実物資料ではなくて複製なり現在の工芸品等ビジュアル的なグラフィックスというイメージですけど、なるべく面で見たとときに迫力があるような作りが目を引くのかなと思いますので、その辺のところは工夫していただければと思います。

事務局：ここで展示する資料につきましては、関先生からもご指摘いただきましたように実物資料ではなく、例えば、写真であったり市民のワークショップで作ったようなもの、あとは現代的なものということ想定しております。展示の内容につきましては資料の方に「まるごと博物館・市民活動・博物館サポーター・松本市案内」ということで各テーマを設けてありますけれども、例えば「市民活動」の方を少し手厚くして松本の公民館活動が活発なものですから、各公民館で自分たちの地区の自慢の一品をここに展示してもらおう市民参加の手段もここで取ればという風にも考えています。

原：確かにここが一番見るところですね。ここが替わっているかいらないか、市民の方が一番見るところなので、きちんと替えて運営していかないといけなくてこれは結構大変だと。1カ月も2カ月も同じようなものやっていたら、そこは毎日通る人が多いし、逆に言うとあまり力を入れないと何か言われちゃうかもしれない。それで、構造的には展示は簡単に

替えられるんですか。

事務局：裏から展示物を入れ替えるというようなイメージです。

原：ここは毎日通る人がいるから、入れ替えるためにある程度人手をかけないといけないのかなと思います。

後藤：私もこれを見たときに、「ここを担当しなさい」と言われたら相当大変だなと思いました。さっきの話だと色がついているところはもう少し狭くするという話だったので、もう少し改善されるだろうと思ったんですけど、それにしてもスタッフがたくさんいるわけじゃないから、多分誰かが任されてすることになると、原さんが言われたように頻繁に替えるということになると大変なことだと思うので、どのくらいの頻度で替えていくのか、誰がどのような関わりを持ってここを作っていくのかという辺りをしっかりと相談されてから決めていった方がいいと思うし、「このスペースを貸すからそこに写真を持ってきて貼りなさい」と言えば、それはそれでできますけど、どのくらいのスペースを誰が何をという辺りをしっかりと考えてやっていった方がいいかなと思いました。

中原：どのくらいの棚を用意するかという部分があるかと思いますが。あまりにもたくさんですと飾り切れないこともあるかと思いますが。松本市には35の地区がありまして、当然ながら飾る基準はきちんと決めなければならないと思いますが、35地区の公民館にお渡ししていくという考え方もありますし、市内の有志の団体や学校、そういうもので実際やるということになると大変かと思いますが、そういう形ですと飾っておくようなことをせずに替わっていく予定はしています。

菊池：そういう35地区の公民館ごとに展示していくと考えるにしてもローテーションを早めに決めてテーマを設定してあげないと回らなくなるだろうと。

もう1つは、さっき短くするという発言もあったのでホッとしたんですが、30mという長さは直線で見るとそんなことはないですが長いなど。なおかつ、これは線ではなく面で考えなければいけないのでそうすると膨大な資料を出さなければいけないので大変だろうなというのが1つ。

それから、高さの問題で2mぐらいまでではないかという意見が出ましたけれども、それはウィンドーギャラリーの真ん前に立って見たとき、自分と遠い位置で見たときとは相違があるんです。引いて見る人には絵の上に出ている屋根自体の高さがどのくらいになって、距離を置いて見たときにどこまで見えるのかというのも計算しなければいけない。佐倉の歴博の民俗展示室の入口にある壁面は高いところまでありますけど、あれを見るととてもじゃないけど読み切れません。やはり高さは見られる範囲でいかなければいけないだろうと思います。それと、ガラスの

壁面の前に立った人だけじゃなくて、少し距離を置いて通りすがりの人が見る目線の高さも計算に入れた方がいいのではないか。結論から言うと、そんなに高くない方がいいんじゃないかということです。子どもにとってはいいと思いますが、基本的に低過ぎるのはダメでしょうか。大人もいるし、どういう人を想定するのか、あまり低いとまた見えなくなるし。

中原：高さは、天井の高さは約3.5mの設定です。

菊池：それを引いたときの視線が実際の壁面のどのくらいまで見えるのか。

中原：この軒下が2mぐらいあります。その右側には2mの歩道がありますので、引いて行って4mぐらいまでは。

原：奥行きはどのくらいなの？

事務局：この棚の奥行きはまだ詰めていないです。

原：30mの展示ケースだと考えると大きくなると大変だと思います。

中原：実際に運営するという話になりますと、ホコリが溜まるとか揺れたときにバタバタと一斉に倒れるとか、そういうことも考えないといけないかと思います。

後藤：向かいに八十二銀行のギャラリーがあるので、あれに負けないように。

菊池：そうですね。建物の中側から展示替えするようになるんですか。

事務局：はい。

菊池：その空間は空いているわけですよね。

事務局：そうです。

菊池：鍵はかかるんですか？

中原：その検討はこれからです。

原：そうすると、なるべく壁が近くてポスター類を埋められるような造作をした方がいいですね。立体物だけ並べるのは大変だから写真でもいいような展示ができる形にした方が、いつも展示品を用意するなんてイヤになっちゃうから。

木下：たぶん「市民活動」という中には小中学校ということが書いてあるんですが、いま学校さんで色んな研究をして発表するものを持ってきて下さるケースがあるので、いま言ったような平面の場所を用意しておくと、そういうようなものを上手に活用できるというのがあるのかなという気がします。

菊池：常設展・企画展の展示とウィンドーギャラリーの展示で差が出ないように考えられると良いです。

原：企画展と連動するような展示ができればいいなと思います。

後藤：ガラスの面が大きいですが結露は心配ないでしょうか。

事務局：全館空調で管理しておりますので、それがないように。

後藤：ガラス面が汚れた場合、外は簡単に拭けるけど中は簡単には拭けなくな

るといふこともあるでしょうから、そこら辺を少し考えておいた方がいいと思います。

菊池：そうすると、中側の棚を取り外しできるようにしておかなければいけませんね。想定外の結露は出てくると思うので。24時間空調をウィンドーギャラリーの中側もするんですか？

事務局：詳細はまだ詰めていません。

菊池：これから冬にかけて空調で温湿度調整していると、空調が切れたときにものすごい温度差が生じる可能性が出てきます。

中原：曇って何も見えないって話になると・・・。

菊池：下に水が溜まるのが問題かなと。そうすると排水溝を用意しておかなければいけなくなっちゃうし。

中原：基本的には裏に壁がないです。だから絵を飾るにしてもどこかに貼るわけではなくて吊る形になっちゃいます。

菊池：何か実物を置くとなると棚を用意しなくちゃならない。それを置くスペースは50cmぐらい取れるわけですか。

中原：はい、そうです。

菊池：結露と高さの問題は検討をお願いします。

パブリックコメントの中で気になったところがあるんですが、「3D映像を使ったらどうか」という意見が出ていましたけれども、それと絡んでこのウィンドーギャラリー展も短めに替えないと「まだ替わらない」という評価になってしまいますので。展示品の中で3D映像を使うときには別の映像を作れるという見込みをつけておかないと、同じようなものが流れているようになっちゃうと思いますので、機器を使うのは結構なんですけどハードとソフトと両面で絶えず更新しなくてはいけないということを前提にしなければいけないのではないのでしょうか。

ウィンドーギャラリーについては以上ですが、ほかにご意見あれば。

1階平面図で見ると、ウィンドーギャラリーは通路1がそこにあたるわけですね。

事務局：はい。

菊池：「子ども向け展示室」のところは外して、「会議室」と収納スペースのところはウィンドーギャラリーになるんですね。

事務局：はい。「会議室3」の横の入口をとばして「交流学习室」の一番入口に近い一角もウィンドーギャラリーになります。

菊池：「子ども向け展示室」も同じような通路幅を確保するわけですか。

事務局：いえ、ここはウィンドーギャラリーはやらないです。「会議室3」は通路は置かずに、ここから直接作業をします。

菊池：とすると、会議をしているときにそこから全部見えるということですか。

事務局：そうです。ここは、例えば、壁が必要かどうかというものこれから検討

していかなければいけないと思っています。

菊池：これ壁がないと中がそこから全部見えるので非常にオープンでいいですけど辛いですね。

中原：平面図を見ていただくと、その奥に会議室や部屋があったりするものですから、そこの明かり取りをどうするのか、左から右へ勾配があつて上りになっているのがあります。

菊池：それとですね、このウィンドーギャラリーを構成するときには人の流れはどちらからどっちへ想定しているんですか？

中原：左から右もありますし、右から左もあります。

菊池：大名町側から入ってくるのと出るのとではどちらが多いですか。

中原：いま想定されるのは、左側の方に新しくバスの駐車場ができて、そちらのお客さまが、前を通過して右側の方へ向かう形になればということです。

菊池：そうすると西から東側への人の流れを想定して展示をイメージするということですね。

中原：実際問題になりますと、ここを通る市民は非常に少なくほとんどが観光客になります。

菊池：ほかによろしいですか。では、ウィンドーギャラリーについては更に確認をしてください、という意見です。

事務局：はい、ありがとうございます。

菊池：では次の説明をお願いします。

事務局：(導入展示についての説明)

菊池：それではただいまの説明に対しまして、ご意見ご質問ありましたらお願いいたします。

関：階段部分をベンチエリアと昇降エリアとの2通りに分かれているということですが、このイラストですと右手の奥がベンチということですが区分けができるようにしてあるのでしょうか。

事務局：この図ですと、同じような木の作りになっていて違いが分かりづらいですが、実際はここがベンチだと分かるように何か上に色を付けたようなソファ状のものを置くということでベンチのところは土足で上がらないよう視覚的に分かるような工夫をしたいと考えています。

櫻井：ゆったり座っているときには奥の人は出やすいと思うんですが、たくさん座っていたときには奥に入っていた人は出やすいですか。途中で席を立つときにどんな形で出てくるのでしょうか。

事務局：横に出ないとみんな出られないということになると大変ですよ。

櫻井：そこら辺は検討していただければ。

事務局：はい、ありがとうございます。

菊池：階段全体の横幅はどれくらいを想定しているんですか。

事務局：5 mくらいあります。

菊池：避難時の安全確保は大丈夫ですか。

事務局：それは大丈夫です。

菊池：そのときにベンチを用意するのはどのくらいの幅ですか。消防法はそれで大丈夫ですか。

事務局：それは大丈夫です。法的にチェックをかけていますし、そのために屋外階段を別にとっておりますので問題ないようやっております。

後藤：片方は登って行って途中で座ってる人はテレビを見ているという斬新なアイデアだと思うんだけど、どのくらい座って見るんだろうね。

事務局：ベンチだと座っていいところだと分かるようなパッと見の工夫と、いまの博物館もそうなんですけど、入館した方でいま1階の奥に映像コーナーがありまして、まずはそこに座って少し休憩される方が多いという現状も見ながら、それなりのニーズはあるんじゃないかと考えています。

菊池：1つは、流す映像の時間ですよ。できるだけたくさんの映像を流すのかと、あとはどれくらい改修するのか。

事務局：いまは2分の番組を5種類セットにして10分で一周するというようなものを考えています。2分の番組ですので、途中で見ても次の番組を頭から見られるように考えています。映像も古くなると更新していかなければいけないものですから、なるべく細かい番組にして差し替えが可能なようにということは検討しています。

菊池：自分たちでは作れないですから予算を確保しないと。

中原：ビジョンは汎用が取れるように16:9の2枚・3枚合わせというような形を考えて一般的に作られたものが配信できるようにしていきたいと考えています。そうでないと、先生もおっしゃられたとおりコンテンツを作る費用は非常に高いものですから、いま市が持っているものも有効活用できるような形にはしていきたいと思います。

菊池：更新していける費用を、ぜひ確保して欲しいと思います。

後藤：この映像は絵だけが流れて音は出ないんですよ。スライドが替わっていくような形で考えているんですか。

事務局：動画として撮影して、ここで流すときにテレビの音量を切って音が出ないようにします。

菊池：音は入れておくわけですね。

事務局：はい、もの自体は音を入れて撮影します。

後藤：階段を上っていくひとは背面になるから見ないですよ。そうすると、下りてくる人が中心になる画像ということですよ。

事務局：いまの想定は、上っていく人が「何かあるぞ」と気付いて、まずここに座って見てもらって、その後上ってもらうと。

後藤：それはないんじゃないかな。

事務局：受付がこの下の位置なので、受付から階段に行くときに丁度目に入る位置にあります。そこから90度折れて階段に上がっていくという流れになります。

後 藤：大名町側から入る人は背にしたまま階段に真っ直ぐ行っちゃいますよね。

事務局：そうですね。仮に、受付を通らないとそうなります。

後 藤：もし、出ていく人を意識して画像を流すとすれば、そっちの方に重点を置いて画像を作っておいた方がいいんじゃないかという気はするんですけど。

事務局：ありがとうございます。

菊 池：これから歩こうとする人に提供する情報です。

事務局：ありがとうございます。

本日ご欠席の笹本先生には事前に昨日ご説明を差上げているんですけども、この映像についてご指摘をいただきまして、映像が展示と関連するものではなくてもいいのではないかと、むしろ、展示では表現できない松本市の魅力を表現すると、補完するという形ではどうかということでご提案いただいております。

例えば、いま松本市は三ガク都といって、学び、山岳、音楽をまちの象徴としておりますのでその辺りを映像で表現したり、技や祭りといった展示には向かないようなものをこの映像に入れて市に対する興味を高めてもらおうという考え方はどうかというようなご指摘をいただきました。

それから、笹本先生から吹抜けの装飾についてもご意見をいただいております。この場所はガラスの吹抜けの空間で施設の顔となる場所であるので、おやっと思わせるようなものが何かあればいいんじゃないかということで、手まりの照明だけでは、もうひと工夫何か欲しいところだということでご指摘いただいております。

中 原：もっと奇抜なものをやったらどうかって話も出ましたが、では何をやるかと考えたときに。

木 下：原先生がいい意見を出してくれるんじゃないかと言っていました。

原：最終的に大きいものを作ると後が大変、10年すれば陳腐なものになるかもしれないから、そういうことが心配で。少しずつ直すということは不可能だしね。

菊 池：ここの天井高はどれぐらいあるんですたっけ。

事務局：一番高いところで10mほどあります。

菊 池：上からぶら下げるということを考えると交換するとき大変です。

原：それの方が大変で、逆に初期投資をしておけば、後は継続してお金が付くかの問題で、10年経てばLEDも変わっていると思うんです。そのときに10m替えるというのは結構大変だと思うんですよね。木下さんに「すごいアイデアはないか」と言われたけどアイデアよりお金の

方が怖くて。それで入口が狭いから機械を入れるのも大変で、そういうことだよ。

菊池：そこはぜひ、ご意見も踏まえて検討してください。

もう1つ、パブリックコメントにもあったんですが、階段の途中で座って映像を見るというのは健常者はいいですけど、車椅子の方が見る場所は確保できているでしょうか。

事務局：この映像につきましては、この階段の下の溜りからも見えるようには考えています。あとは2階に上がりますと「図書・情報室」というのがあります。ここからも見えないかということで、いま天井の吊ものの位置を調整してここからの視界も確保するよう検討しています。

菊池：ぜひ、車椅子の方、身体がご不自由な方たちも見るができるような方法を考えて欲しいと思います。

原：3階は「常設展示室」になっていて2階は常時開いていないとなるとエレベーターで上る人の数の方が多くなりますかね。お年寄りも階段で3階まで行くのは厳しいと思うんですけど。

中原：かなり緩やかな階段にしてはいますが。

後藤：市民芸術館ができたときに、あの階段は贅沢だと思ったんですが、いまになってみると結構ステップが短いから上りやすい。できればこの階段も緩やかな感じで上がっていった方がいいと思うんですけど。

菊池：いまのご意見もその通りですが、先ほど櫻井先生から奥に座っている人が抜け出しやすいくらいの階段幅を確保して欲しいという意見と、もしかするとバッティングするかもしれないですね。その辺の調整を上手くできるかなと。ほかにご意見ありますか。

後藤：「松本歴史年表」というのは階段の前のところにありますけれども、これはどんなイメージですか。

事務局：これは年表として古い時代から新しい時代までをざっと俯瞰するものとその後松本市の概要を歴史だけではなくて文化や自然といったものも紹介するものをここで作りたいと思っています。

後藤：字をいっぱい書くんですか？

事務局：字と写真が出てきます。

後藤：わざわざ立ち止まらないで階段に上がっていかないでしょうか。この辺のところをもっと面白くイラスト化するなりして字を減らしてぱっと見られるようにすると、ここは1つのメインの展示物になるんじゃないかなと思うんですが。

事務局：まだ年表の作り方までは検討が進んでいなかったものですから、年表自体は松本市の歴史を俯瞰して紹介するコーナーがこの博物館にはないものですから、必要だとは考えていますが表現方法は検討します。

後藤：「松本データベース」というのが横の方に置いてありますけれども、こ

のイメージは駅のところにある、ああいうようなイメージですか。

事務局：はい。あのようなイメージです。これですと線が2つ引っ張ってあって左側には机のところ末端みたいなものが置いてあるんですが、この末端はなしにしようかと思っています。ですので、壁に立てかけてあるタッチパネル式のもので松本市の歴史、文化財、色々な博物館、イベント情報などを検索できるようなものにしたいと考えています。

後藤：Free Wi-Fiになるんですか。

事務局：はい。

後藤：じゃあここに座って自分で検索したりだとか。

中原：実際5年後というのは、ここら辺りのパソコンを構うという人はほとんどいなくて、自分の持っているもので色んなことをする人がほとんどだと思うので、それに対応していきたいとは考えています。

櫻井：ここだけということではないですが、目のご不自由な方への心遣いや楽しみ方ということに関しては何か考えていますでしょうか。

事務局：全体的に解説に点字を付けたり、点字用のリーフレットを準備することを考えています。「常設展示室」「子ども向け展示室」については実物を触る機会を増やして触ってもらいながらものを感じていただくということを考えています。

あとは、例えば、東京の博物館ですと目の見えない方用の触れる展示みたいなものがあるんですけども、今回はそこまでの準備はできていないというのが現状です。

櫻井：階段を使うにしても何をするにも点字のところも色々と考えてみることをお願いします。

事務局：はい。

菊池：「子ども向け展示室」に書いてある中で、いまの説明ですと触れたりすることができるということでしたが、資料はどうするんですか。子どもに触れたり持たせたりすることが可能な展示室にするということですが、その場合そこに置く資料はどういう風に調達する予定でしょうか。

事務局：後ほど「子ども向け展示室」の方でも説明申しあげますが、例えば、土器片だとか、化石館から提供していただける化石などを直に触っていただくということを考えています。

菊池：化石館から実物を借りる？触っても大丈夫ですか？

事務局：大丈夫だという了解のもとで借りてきます。

菊池：割れたり壊れたり数が増える可能性があります。それは、博物館で資料として登録してしまうと、例えば、実物の化石が壊れても学芸員の判断で問題ないということになっても、博物館の財産として登録されたときに問題を処理できますか。

事務局：今回準備するものは化石館にも確認して資料として登録されていないものを調達して出す予定です。

菊池：土器片もそういう扱いはできますか。

事務局：はい。いつ誰から持ち込まれたものか、わからないという土器片が考古博物館にかなりの量がありますのでそれを提供する予定です。

菊池：それを聞いたかったんです。「子ども向け博物館」は入館者に触ったり持ったりするものを台帳に登録してしまった資料を使うと色々な問題が生じるだろうと、で、どうするのかと思ったら登録しない資料だと。でも、それもきちんと管理はしてください。

事務局：はい。

原：「子ども向け展示室」も誰かがいるわけですよ。

事務局：はい。

原：大事にして欲しいのは、文化財なのでそこはきちんとわきまえて触るということをやらないといけないと思うので、それができるような体制作りをして欲しいと思います。

菊池：ついでに言うと、この資料をどこで保管するのかということですよ。そのまま収蔵庫に入れるわけにはいかないでしょうから。

笹本先生のご意見にもあった「もっと松本らしい奇抜な展示品がないのか」ということでしたが、何かありますでしょうか。

中原：笹本先生の意見ですと、波田や梓川や四賀の特産物のスイカ、松茸、りんごを吊るようなことを考えてみたら？ということでしたが。

菊池：たぶん、発想を変えたら？ということなんでしょうね。パブリックコメントの中にも「旧松本市以外のところはどうするのか」という意見がありましたよね。だから、シンボル面ではそちらの方をもう少し意識した方がいいのかも知れませんね。いま、手まりのイメージが出ていますがこれにプラスして旧松本市以外のところから何か入れられるもの、象徴的に出せるものがあるかどうかということを考える必要があるのかな。

関：一番の顔の部分ということで、エントランスですけれども、実物展示をここに飾るとするのは難しいスペースだと思いますし、絵を見ると壁面「松本歴史年表」がある上あたりにスペースがあるのかなと思いますが、例えば、ここにプロジェクターで映像を投影させてそこに旧松本市内の各地の紹介に繋がるようなもの、それが工芸品でも生産品であってもいいと思いますが、季節的に何か投影して目を引くようなもの、壁面をデザインするというのもどうかなと思います。

また、我々だったらLED照明を見て松本手まりだとすぐに分かりますが、初めて来た人にはおしゃれな丸い照明器具だとしか思わないのかもしれないので、その手まりを紹介するのも背景に投影するのだが、これも菊池先生がおっしゃるように映像資料になってしまうので、なかなか

か更新する際やメンテナンスについても検討しなければいけないですけれども、壁面を活かしたものであれば年表に出てくるようなものも、文字で読み取るのではなくてグラフィックスで年表なり松本市の自然と歴史が簡単に分かるように投影されていると、少し立ち止まってそれを見て、また展示室へ向かって実物の資料をそこで見学することに繋がるのかなという気もしますので、そういうところも検討していただければと思います。

原 : 安曇野博物館で展示を担当したときに入口が困りました。「安曇野って何だろう」って。結局グーグルの写真を使って安曇野全体が映る写真を1枚入れました。そうしないと、どういうところなのかということが分からなくて、安曇野市は今までアルプスをバックにした写真しかなかったんですけど、それだと全市町村が入らないです。全市町村が入る写真は、まつもと空港辺りの上から俯瞰するしかないです。「こういう地形だよ」というイメージで右側に八面大王、左側に泉小太郎と考えてやっただけです。そういうイメージのものを出すのがいいかなと。やっぱり松本に来たときに、確かに歴史とか色々なものはあるのかと思うけど、地形とか「こういうところにあるんだな」というイメージのものがあってもいいのかなと。それは壁にあってもいいのかなと。こんなところにあるというものが出来て、山にこんなに雪があったり、そういうものが映像で松本の姿をどこかで表せないかなと。俯瞰して空から見て「松本ってこういうところにあるのか」ということが分かれば。松本城はどういうところにあるのかといえば、女鳥羽川に全ての川が流れ込んで固まるところ、そういうことが分かるような、更に盆地のこういう地形が分かるようなところがどこかにあればいいかなと思います。「ここだよ」と言えるものがどこかにあれば。

菊 池 : いまのご意見も踏まえて、ぜひ中で考えていただければ。「これどうだ」という意見があれば改めて。

中 原 : この壁は非常に広大でこのままではもったいないなと個人的にも思っています。先生方からもご意見をいただきましたので色々と検討していきたいと思っています。

菊 池 : 壁を映像のスクリーンとして使うことになったら、きちんと毎日拭くということも必要になると思います。

それと、いま壁の話が出たのでついでに1つ教えてください。階段の脇、手前側に付いている黒いのはどのくらいの高さが出ているんでしょうか。

事務局 : 手すりも兼ねていますので1 mぐらいにするつもりですが、もっと高くすることもできますし、手すりを分けて壁だけ立ち上げることもできますし、手すりも兼ねて1 mに抑えることもできますし、まだ、素材

は決まっていませんので、ガラスにすることも可能です。

菊池：受付の人たちはこの下にいるんですって？

事務局：そうです。

菊池：ということは頭の上にお客さんたちがいて自分たちからは見えないということになるわけですね。なるべくなら、ガラスを使わない方がいいと思います。特に透明ガラスですと子どもがぶつかる危険性があります。結構そういった事故が起きますので、ガラスを使うときには擦りガラスにしたりしてガラスがあるということが分かるように工夫しないといけないのではないのでしょうか。これでもいいと思うんですが、チケット売場とかそういったものが見える範囲にできるかどうかですね。今更ですが、まだ間に合うかと思います。

ほかにご意見ございますでしょうか。「導入展示の考え方について」はご意見はよろしいでしょうか。では、色々なご意見が出ましたのでそれを踏まえて検討すべきところはお願いいたします。

ここで10分ほど休憩を取りたいと思います。

事務局：(常設展示についての説明)

菊池：このジオラマの内容と構造についてご意見いただければと思いますのでよろしくお願いいたします。

ジオラマに盛り込む内容、情報はどのようなものを考えていますか。

事務局：はい。お城というよりは城下町全体について知っていただくジオラマにしたいという風に考えております。

まず、展示室に松本市域の地図を床面表示して、それに合わせた形でジオラマを配置します。ジオラマには町屋と川、それから城郭などを再現して場所によっては町屋の一部でお祭りが行われているとか、実際に史実に出ているような、例えば、火事があった場面なども表現できればと考えています。ただし、いまはこのサイズのジオラマは人のサイズが米粒より少し大きいくらいと、人はかなり小さくなってしまいます。ですので、建物の縦方向はちょっと高さを強調して作っていきたいと考えています。

後藤：確認ですがジオラマの縦横を教えてください。南北東西。

事務局：はい。南北が約10m東西が約6mです。

菊池：かなり大きなジオラマですね。

事務局：ジオラマの見せ方については、果たして奥の方まで見えるのかという課題もありますので、完成したところでCCDカメラのようなもので映像を撮ってジオラマの横の手すりに埋め込んだモニターで見られるようにしたいという風に考えています。

原：大きいから上に橋でも架けて見たらいいくらいですね。

後藤：ジオラマの部屋は右の下から入っていく形になるんですね。この中の動

線はどのように考えていますか。

事務局：右下から入って反時計回りを想定しています。

後 藤：ジオラマに沿って人々がこういう風に動くだろうという想定だとすると要するにまた入口まで戻って欲しいということですね。

事務局：はい、そうです。

菊 池：床面の地図は旧松本市ではなく現在の松本市を示されていますか？

事務局：今回のジオラマの縮尺に合わせてその大きさを床の地図も貼り付けたいと思っていますので、ほぼ中心市街地だけになります。住宅地図にするのではなくて、川といまの目印になるような、例えば、線路と駅というような最低限の表現にしたいと考えています。

菊 池：そうすると、ジオラマの縮尺と床の地図の縮尺が同じにすると、かなり地図に落とせるところが狭くなりますよね。

事務局：はい、ほぼ中心市街地だけになります。

菊 池：現在の松本市域は近世の松本藩の領地と重なるんですか。それとも近世の松本藩の領地よりいまの松本市域が広がっているんでしょうか。

事務局：近世ですと松本藩領といって大町の方までかなり広く範囲がありました。現在の松本市の中で奈川地区だけは木曾エリアですので松本藩からは外れているところです。

菊 池：だとすると、松本城下町だけではなくて床面の地図は松本藩領もあつた方がいいのかなと、ふと思ったものですから。

後 藤：この部屋に入ると入口にある松本城前史っていう資料はほとんど目に入らずにジオラマに行ってしまうんじゃないかなと思います。ジオラマを作り込めば作り込むほどメインの展示物になるので、ここに目がいつてもしまう可能性が高いと思います。さっきの動線だと一周してきて、もう一度回って壁面の資料を見るというような展示になれば、周りが生きてくるけれども、どうなんだろうかなと思ったんですよね。

事務局：担当者の願いとすれば、ジオラマと壁面をジグザグに進みながら動線をいつてもらいたいという狙いはあるんですが、改めて検討します。

後 藤：検討してもあまりいいアイデアは出てこないのかもしれない。もっと繋げられる方法は無いものですかね。

原：ジオラマが大きくて、籠と甲冑ぐらいであとは目を引かないですよ。

後 藤：小さいものを並べるのではなくて、周りも見応えがある展示物を持ってこないと目が引かない可能性があると思うんですよ。

原：小さいものは見る人は見ると割り切れればいいんだけど、できれば迫力がある展示物を3つぐらいは用意した方がいいと。そうすれば、そのところで足を止めてくれると思うんです。迫力のあるものを3つ、ブロック3つぐらいでやらないと周っていかないのでは。

後 藤：もう1つ、ジオラマの平面のところでは何を見てもらうんでしょうか。

事務局：狙いとしては、例えば、町割り道路がいまの時代もそのまま残っているところですか、場所によって武士が住んでいるところ、町のところ、あとは街道が通っているところをジオラマで表現したいと思っています。

後 藤：ジオラマの中に映像を入れたり言葉を入れるということですか。

事務局：そこまでは考えていません。

後 藤：例えば、善光寺街道の解説はそこのところに言葉で出るだけですか？

事務局：はい。

後 藤：ジオラマの表現自体、そこからみんなに見てもらいたい情報が欲しいというか、ただ町があって道があって米粒のような人がいっぱいいるだけのイメージになってしまうと勿体無いという感じがします。

事務局：そうですね。

菊 池：ジオラマと床面の地図と周りのケースの中の展示物がまだパラレルというか離れているんですね。ジオラマで何をわかってもらいたいかというところは、いまの説明で分かるんですけど、それを具体的にどう見てもらいたいところを少し工夫する必要があるのではないかと。これを見ると端的に言えば「なぜ女乗物なのか」「なぜ男の乗物ではないのか」が分からない。こういったところはジオラマと同じ時代だからということであるんでしょうけど、図面をパッと見たときに、せっかく作ったジオラマが周りの展示ケースの中とリンクしてこないのではないかと気がしました。

ジオラマはここではなくてもエントランスの方に置いてもいいかも。おっしゃっていた「ジオラマに込めた意味合い」をどうやって見る人に理解してもらいたいということを少し検討してください。文字だけの説明だと読まなければ分からないですから。

もう1つは、見せ方についても皆さんからご意見をいただきたいのですが。いまジオラマの下から引き出してくる展示を考えているわけですがこれが有効なのか、問題がないのかについてもご意見をいただければと思いますのでお願いいたします。

「断面の見せ方について」の①に書かれている絵ですが、見ようとすると屈まなければならない。そうすると、1人しか見られないんじゃないかという不安はあります。これが全部引き出されちゃうと下は見えないというようなことも考えられるんですが、ご意見いただければと思います。

後 藤：そうですね、見るのに順番待ちしなければいけないですね。

菊 池：手法としてはたぶんありかと思うんですが、そこで内容をどう見てもらいたいのかというのを少し工夫してください。子どもにとってはいいのかもしれませんが、大人にとっては低過ぎて辛い高さだろうと思います。引

き出してきたジオラマの部分とリンクしていればいいんですが、引き出しに入っているものとジオラマが関係ない情報が出てくると、引き出した人はジオラマもその部分だと思いかねないです。

事務局：想定では引き出すポイントも実際に発掘調査をやったところを引き出してそこから出たものを出すと。

菊池：ジオラマの縮尺とこれは合いますか。

事務局：縮尺は合わなくなります。これについて笹本先生からは、引き出したものを横から見るのは大変だけれども、引き出したものを上から眺めることならばできるのではないかと。例えば、地層の縦のものを横にして見せるやり方で、手前が深いところで奥が地表面に近いところという説明を付ければ、そういう見せ方もできるのではないのかというご意見をいただいております。

菊池：縦のものを横にすると誤解を招くのではないのでしょうか。

原：地下5mのイメージをここに出すのは難しいのではないかと。逆に言うところの場所で、ジオラマの補強ができるという意味ならばどうかなど。出たものに絞った方がいいのかなと思います。

菊池：高さが60cmというのは分かりましたが、引き出す奥行きはどのくらいの想定ですか。

事務局：まだこれからですが50cmぐらいになるのではないかと思います。

後藤：直方体で引き出すような形になっているけど三角すいにすれば両面に展示が使えますよね。上からも見えるし。

原：引き出しは発掘に合わせるよりジオラマの見せたいところに合わせた方がいいと思います。見せたい方に合せてその違いが分かるようにした方がいいかなと。

後藤：例えば、「引き出したらもっと詳しい展示ケースの5番を見るように」みたいにしたら、出てきたものをもっとたくさん並べられるし。

菊池：これで展示ケースとジオラマがリンクしてきましたね。

後藤：菊池先生が言ったようにジオラマと展示ケースをリンクさせることを考えた方がいいんじゃないですかね。

事務局：ありがとうございます。

後藤：御殿のところに女性が住んでいましたと説明書きしてもいいと思うし。

菊池：ほかにご意見ありませんか。だいぶスッキリしてきた気はします。

実は一番右下の引き出し見たことがあるんです。大分県のいまの佐伯市の蒲江というところのそこに漁撈用具の資料が入って収蔵庫兼展示室にしたんですが、そのときにこの手の引き出しがあって全部引き出しが出てきたら上しか見えないということに気付いた。要するに重なっちゃうというんです。意外に見られるものが少ない、せっかくけど1つずつしか見られなかったということがあります。あと透明ガラスはそこで

ぶつかっちゃうので、透明ガラスがあるところは基本的に「ガラスがあります」と書いておかなければいけないなと思いました。

ジオラマについては色々な意見があって検討材料が出たのかと思いますので、いまのご意見も踏まえて2月の最終的な実施設計に反映できるようにお願いいたします。

「常設展示」についてはよろしいでしょうか。では、「にぎわう商都」についてお願いします。

事務局：(にぎわう商都・ともにある山について説明)

菊池：気になったことはございますでしょうか。

展示内容と違いますが、1つ質問してよろしいでしょうか。ここは小テーマは1つしかないんですって？

事務局：小テーマはそれぞれ複数ございます。中テーマの1つ目の小テーマ「行き交う情報・物資と人」の後に「松本の名産」というものが2番目に続きます。続いて2つ目の中テーマ「商都の祭り」では「あめ市のにぎわい」の後に「市と伝説」という小テーマが続きます。印刷で抜けておりました。すみません。

後藤：原さん、発掘されている商品と商人のからみあたりで構築できない？材料的に乏しいですか？

原：商人は乏しいです。

後藤：陶磁器だとかはどこでもやるんだけど、それ以外の発掘品の中に・・・。

原：それ以外の動いているものというのは陶器は動くのは間違いないんですけど、他に意外とタバコとかそういうものは出てこないんですよ。物資としてというものはないです。

後藤：この間竹内さんが話をしてくれて煙管の首、これは近江の日野で作られている煙管で全国で二例目。それが近江商人が運んできて松本の中に定宿があって、そういう人たちとの関わりの中でそういうものが流れてきたり、あと、うちの方でも展示してあるんだけど、高島と書いてある硯、これは近江の高島硯じゃないかなと。そういうような発掘して出てきたものを活かして、商人とのつながりみたいなものが出てくると、面白いものができるんじゃないかと思うんだけどね。

原：1点ものしかないんですよ。要するに1点ものというのは、南牧村もあれだけ砥石が出てくるとやっぱり砥石が特産というのが分かるんですけど。やっぱりそのところで、逆にものすごく説明が要りますよね。

後藤：9ページのにぎわいの部分は発掘をしている部署と連携をとれば、もう少し資料的なものが活かせるところが出てきてくれると思うので、そこら辺を検討されたらと思いますけれど。

菊池：展示構成についてはだいたいこんな感じで、確か前回こんなご意見だっ

たと思いますので、あとは中にこのテーマを構成する展示資料をどう入手し、何をやるかというところをご意見をいただいて検討していただく。それで実施設計の中に落とし込むということ。それから、10年後次の展示替えも想定されますけれども、展示替えをするということで考えているわけですから、次に入れ替える展示資料を少しいまのように出てきたご意見の中から、詰めていく作業をしていただければと思うんです。

小テーマのタイトルが「行き交う情報・物資と人」なんですが、「物資」が固いなど。ついつい「モノと人」という言い方になってしましますが。ついでに言うと前のところも少し・・・「上高地の山」のところ。小テーマのタイトルで「上高地ってなに」というのが出てくるんですが、ほかの小テーマと少し違うんですね。「これでもいいか」とも思うのですが。

原 : 上高地のところでは「美ヶ原と学校登山」と出てくるんだけど学校つながりだと上高地かなど。美ヶ原入れるんでもいいんだけど展示から見ると西山の風景になっている中だから構成上厳しいかなと思うところもあります。

事務局 : 今回テーマを「ともにある」でぐるっと囲まれているというイメージで東は美ヶ原から西は上高地というところから始まったんですが、いかにせん美ヶ原は資料とボリュームが少ないものですから市内の小学生は、まず美ヶ原に学校登山で上るというところを紹介して何とか美ヶ原を展示に出せないかなとした結果がこれです。

菊池 : 初めに山に囲まれているということをおおとする大前提があったということですね。

原 : 上高地は日本八景に選ばれて環境庁は日本八景を売り出しますので、あの辺の姿というのはやっぱり日本的に観光に売り出すことで。それから、この中でもう1つ出して欲しいのは、文人墨客が結構来てて、そういうものを大きく展示してもらえたらいいのかなど。例えば、白骨温泉にはたくさん来ていますね。上高地をもっと売りにして欲しいと思います。

事務局 : 上高地に来た文人は、例えば、芥川龍之介だとか松本市の窪田空穂は上高地でウエストンに実際に会った記録もありますので、その辺りを展示したいと思います。

先ほど言われました白骨温泉につきましては温泉のコーナーで浅間温泉に来た文人と併せて紹介できればと考えています。

それから、笹本委員から山の展示についてテーマのタイトルについてご指導いただきまして、資料と内容を見る限り山の資源の活用という印象があるということで、中テーマの1つ目は、やはり「生活資源としての山」という考え方を表現したらどうかと、2つ目の中テーマについては、そこから新たな資源として観光活用というような考え方をタイトル

に入れてはどうかというご指摘をいただいています。造作につきましては、「高さについて後ろのグラフィックと併せて注意して決めて欲しい」というようなこともいただきまして、壁面のグラフィックもよく観光写真で使われているような写真ではなくて誰かの目を通して書かれた絵画なんかにはしてはいかがかというような提案もいただいています。

菊池：いかがでしょうか。

関：先ほどご説明の中で自然の部分と近代のアルピニズムの部分は山と自然の博物館があるのでそちらに委ねたいということでしたけれども、実際に展示の11ページを見ますと、例えば、ウエストンに關係するものですと登山者芳名簿なども近代登山だと思うので、ここも少し紹介しつつ入口ぐらいの紹介でしょうか。

事務局：そうですね。ここで出した資料については、例えば、近代登山の歴史とか近代登山の道具を展示するというよりは、上高地に来た人々というような扱いの中で、この人たちを紹介していきたいというところです。

後藤：「山の生活 山に生きる」のところなんですけど。江戸時代の関係で言うと松本は昔この2階に鳥なんかの剥製がありましたけれども、そういうものか何かで、次の段階のときにそういうものをやれば鷹匠の資料も出土されているので、それを繋げて活かせるし、いくつか資料を考えておいて展示替えをしていくというように工夫されたらいいかと思えますけれども。

菊池：鷹狩の資料はヒナを展示するんですよね。そうすると献上するまでの間松本藩では死なないようにするわけですがエサのことなどの資料は持っていないのでしょうか。

後藤：エサなどの資料はないですが、捕れなかったから罰せられたというものはありますので。

菊池：宮内庁には「鷹犬詞大概」の書物が入っていて鷹狩用の鷹に何のエサをあげるかというものが描いたものが出てきます。貸し出してくれるかわかりませんが、そうするとお鷹場の問題と絡んでくるはずですよ。

ほかに何かありますか。それでは、いろいろなご意見が出ていますので、これらの意見を踏まえて資料の再構成、できるものとできないものがあると思いますが、それと今回だけでなく次の展示替えの展示の資料の提案もあったかと思えますので、その辺も少し検討材料として残しておいていただければ。

では、次にいきたいと思えます。

事務局：(常設展示更新エリアについての説明)

菊池：ありがとうございました。

後藤：毎年更新という意味合いは、どんなことですか。

事務局：各年更新は、例えば、開館5年間は更新せずにその次の年から各テーマ

を1年ごとに更新していくということで、例えば、開館6年目に大テーマの4つ目の「開かれた盆地の温泉」が違うテーマに変わって、また次の年は5の「変わりゆく社会の新しい時代を作る文明開化に見る民衆の力」を新しいものに替えるというようなイメージを考えています。

後 藤：替えない展示もそうですが、ここに出ている資料は5年間出しっぱなしという意味合いになりますか。

事務局：5年間の中でテーマは変わらないですが資料の差替えはあり得ます。

後 藤：資料の差替えはどの程度を考えていますか？

事務局：まだそこまでは想定しておりません。

後 藤：うちは割に長く出しておくのが好きな博物館でもものの保存から言うと問題かなと思うので、この機会にある程度替えていくということは今後は一度収めて次のを出していただきたいと思うんですけど。そうすると、やっぱり温泉のところで言うと浅間温泉・白骨温泉と全部温泉で並べなければいけないのか、1年目は浅間温泉で2年目は扉温泉をやるとか美ヶ原温泉をやるとか替えていって5年で変えていく体制を考えるのか、その辺の方はどういった考え方なのでしょう。

事務局：例えば、温泉で言いますと浅間温泉と白骨温泉がいま資料の中心になっているんですが、なかなかその他の温泉で出せる資料が少ないという現状もありますのでテーマを変えない中で、例えば、浅間温泉の中で違うものを出していくということはあると思います。

菊 池：非常に博物館の役割の根幹にかかるご意見でしたので、よく検討して下さい。

原：最初の更新は6年目？

事務局：まだ確定はしていませんが。

原：予算が付くから早く、なるべくなら毎年やっていって早めにやってもいいと思うんですよ。そうして毎年やっていくということで取っておかないと5年6年目になって変えるというのは難しいと思うんです。だから、無理してでもやっていった方がいいのかなと思うんですが。6年目になって「来年の予算をお願いします」と言ってもたぶん付かないと思います。

菊 池：ちょっとよろしいでしょうか。各年更新のところで考えている展示方針は展示の差替えではなくて全部入れ替えますか？

事務局：テーマも全部替えます。

菊 池：だとすると原先生がおっしゃった通りで、予算を確保しておかないとえらいことになるね。何だかずっと予算の話ばかりしていますが。

事務局：一応、このエリアについては展示ケースは汎用性のあるものを使ったり、展示パネルも館内で印刷して差し替えができるものということで、なるべく更新費用を最小限に抑えられるような設計で進めています。

- 菊 池：ほかにご意見ありますか。説明についてはこれでよろしいでしょうか。
「マツもっと展示」をやめて、「ウィンドーギャラリー」という名前が
付いていましたが、これは確定ということでしょうか。
- 中 原：まだ100%確定ということではないですが、いま現在は「マツもっと
展示」ということ自体はパブリックコメントでも非常に強い難色がある
んですけれども、それに代わる名前が必要だという認識はあります。一
般論としては、いま「ウィンドーギャラリー」という形で一番妥当な線
という考え方でいます。
- 菊 池：2月末の実施設計図の納入時にはタイトルが確定しているということで、
そこでまだ揺れ動く可能性があるということではないんですね。
- 中 原：そうですね。最終的には確定させなければいけないと思っております。
- 菊 池：わかりました。さっきそこだけ聞き忘れたものですから。
では、「子ども向け展示室」についての説明をお願いします。
- 事務局：(子ども向け展示室についての説明)
- 菊 池：ご意見ご質問などありましたら。
展示という考え方から、体験型に少し振れるということですね。
- 事務局：はい、体験がメインです。
- 菊 池：体験型にしたときの共通理念みたいなものはどこに置いたんですか。1
から11まである中で、これに共通して出てくる考え方というのはどん
なことで位置付けようとしたんですか。
- 事務局：体験を通じて松本らしさを学んでもらうことと、親子のコミュニケーシ
ョンを促そうというものです。
- 菊 池：提案として親と一緒にではなくても利用を可能にするとなるとその趣旨
はどうやって関連付けさせていくのかというようなことと、「松本らし
さ」の定義は何だろう、人によって違うと思いますが、それは許容範囲
で認めていくことにするわけですよ。その2点が分からなかったもの
ですから。
- 事務局：先ほどの親と一緒にするか、子どもだけで利用できるかというのはいま
までの設計に大きく関わってくることであるので、ここで相談したいなと
思っています。
- 櫻 井：子どもだけで来られるかといったら、たぶん学校の決まりで学区外に子
どもだけで行くというのはないと思います。なので、もし学区内のとこ
ろに来るとしたら限られてしまうということなので。1人きりで来ると
いうことは少ないのではないかなとは思っています。
- 後 藤：休みに親が子どもを置いて買い物をするにはあるかも。
- 中 原：実際にいま懸念しているのは、「子ども向け展示室」は注目度が高いん
ですが、今回の博物館には駐車場が無いということが1点と、大名町の
土地柄子どもをそんなに見かける場所ではないですよ。なので実際に

来ていただける人はどうなのかというと、いま先生がおっしゃられた学区内、それからマンションと限られてきてしまうのかなと懸念していて、やはり一番大きいのは駐車場が無いということで、親子で乗り付けて来る。有料までしてここに来るのかという話になってしまうものですから、たくさん利用していただくのが理想ですが、実際に蓋を開けてみたらどうなのかなというのを心配しています。

櫻井：小さい子まで置いておくということですか。

中原：未就学児については保護者同伴というのが基本スタンスです。

原：結局なかなか来ないと思うんです。どこの博物館も子どもだけで来てくれることは滅多になくて、学校単位でバスで来てくれて場所を作って昔の遊びをしたりしているんだけど、子どもだけだと連れて来ないと難しいかなと。これだけのメニューが用意してあって多過ぎるような気もするし、「こういうようなものができるよ」というような目玉になる大きなものを1つか2つ用意した方がいいのかなとも思ったりします。それか虫かご作りとかしながらイベントを繰り返してやっていると。「子ども博物館友の会」みたいなものを作ってやっていくような活動をしていかないとここが生きてこないような気がするんです。これは学芸員が努力して月に一度子ども教室などをして時折付加価値が高いものをしたりしながら運営していかないと厳しいのかなと思います。

菊地：ありがとうございます。貴重なご指摘をいただいたと思います。

後藤：いろんなものは棚の方に片付けるんですよね。例えば、朝来て子どもたちがやり始めて、子どもたちがそのまま行っちゃうとその片付けはカウンタースタッフがするんですか。

事務局：はい。もし、親が同伴ならば親が片付けなさいと言ったり一緒に片付けたりというのがあるんですけど、子どもだけだとそういったことが増えると思います。

後藤：一応子どもはどこに持って行って遊んでも部屋の中なら。

事務局：子どもが多く来る時間だけスタッフを2人に増やしてというような監視体制の強化は必要かと思います。

後藤：この中では水道やジュースを飲むんですか？

事務局：それも今後の検討なんですけど、先行事例では子どもがたくさん動き回るのでその場で水分を飲ませたいという親御さんの意見も聞いていますので引き続き検討します。

原：これだけものを広げたところで飲むには狭いと思うから、それは別に作った方がいいじゃないでしょうか。

後藤：むしろじゅうたんがシミにならないですか。

事務局：いま床はじゅうたんではなくてリノリウムというもので想定しています。

中原：じゅうたんですと汗の匂いが籠りやすいそうです。

原：ここはソフトの方が大切かもしれませんね。

中原：この名前も実際体験という形になっていますので並行して。

櫻井：「子ども向け展示室」ではなくて「子ども体験室」とか。

中原：そうですね。どんな名前にするか考えているところです。

原：前の百瀬新治館長が、「子ども体験クラブ」「博物館友の会」というのを作って毎月30人ずつ集めてやっているみたいですが結構大変そうですが、そういうことでもしないと集まらない気がします。

後藤：あとは衛生面の関係ですが、それも早くしておいた方がいいと思うんですが、いま色んなウィルスというのがあるから、その辺をどういう風にするのか考えておいた方がいいと思います。

事務局：はい。

菊地：いろいろ役立つ意見が多かったと思うので、ネーミングの問題も含めて検討していただきたいと思います。

事務局：(特別展示室についての説明)

菊地：ありがとうございます。この展示パネルですけれども、この図面上真っ直ぐに直線的に動くだけを想定しているのでしょうか。

事務局：はい、そうです。

菊地：部屋の区切り方はいろいろ出てくると思うんですが、展示室の中で壁面が欲しいときにこの1枚ものの大きな展示パネルだと小回りが利かないですよ。それは、例えば、部屋の真ん中辺りを区切りたいときはどうすればいいですか？

事務局：この資料の表にうっすら青いのが自立式の壁パネルになります。

菊地：高さは？

事務局：2.5mぐらいです。

菊地：いま広い方が東西方向になるんですかね。東西方向を南北方向に区切る形になるんですよ。これを途中で組み合わせて東西方向にも区切れるようなことは考えなくて大丈夫ですか。例えば、1/2利用時に更にこういう区切りを入れて使いたいという時が出てこないかということです。こんなに簡単に直線的な展示室の利用の仕方だけとは限らないのではないかと。いまのだと、一番大きいので1枚でスパッと済ませる案ですよ。それに対してもう少し部屋を小さく区切れる方法を確保しておかなくてもいいんですか、という質問です。

原：自立型展示パネルというのは、いくつも組み合わせて東西方向に並べることもできますか。

事務局：できます。一応いま10枚準備していますのである程度の長さに区切れることはできますが、この壁とは違って天井の上が開いていますので部屋にはならないのかもしれない。

原：そうすると、もしこの中で、例えば、真ん中で区切って一室と二室とい

うこともできるんですか。横に引っ張れますか？

事務局：完全に壁がそのままくるような形で、絵にうっすらと扉が書いてありますが、職員が出入りする通用口があるだけです。

原：2つの展示室はできませんか？

事務局：はい。一室だけの利用になります。

菊地：この図面上の区切り方でいうと照明の問題でもとても楽ですよ。ただ、ウォールケースの中だけは心配です。

原：企画展をするときに、どうしても2つ部屋が欲しいというときがあるんですけど、それをやるとすると自立型展示パネルで仕切るしかないということですか。

事務局：そこで仕切るということですよ。

菊地：1回外に出て隣の部屋に入ることはできますか。

事務局：できないです。

中原：建物の形上の規制が多くて、本当は仕切れれば一番いいんでしょうが。

菊地：たぶん企画展の展示室の構成を考えていくときに、素直に四角の中で処理できるときと、どうしても曲げたいときが出てくる筈なんです。そのときにどう対応すべきか、自立型の壁面だけでやれるのかどうか。上を見せたくないときがとうぜんあると思いますがいかがでしょう。

関：可動式の展示パネルは、一番最後のページにある右下の収納と書いてある納戸みたいなところに入っているんでしょうか。

事務局：そうですね。ここにある細かい展示パネルはウォールケースを隠すためのパネルです。

関：では部屋を仕切るためのパネルではないでしょうか？

事務局：仕切るためにも使えます。

関：展示パネル用レールというのが、ほぼ部屋の外枠にぐるりとあるんですが真ん中に分ける場合に、例えば、レールを真ん中に・・・。

事務局：そうなんです。真ん中にレールを入れるとそこにレールに関する造作が入ってきて真ん中に照明が設置できないというリスクを設計者の方から言われていまして。

関：照明はライティングレールにスポットを付けるという形ですか？

事務局：そうですね。

関：そのライティングレールに触ってしまうということがありますか？

事務局：はい。レールのラインだけは外して、ライトを設置するというようになってきて真ん中にライトが置けないというのはどうなのかなと迷っているところです。

菊地：基本的に展示室に照明が飛び出すわけではないですから、据え付け型の照明は天井の壁面の中に収めることが多いでしょう？あとはLEDか何かを使って下から照らすか上からスポットで照らすか、そのときに真

ん中を少しずらして使えばいいだけなのではないでしょうか。真ん中に照明を置けないというイメージはまだ掴めないですが。

事務局：そうですね。

菊 地：使わなくて大丈夫ということがあればいいと思うんですが、一度作ったらやり直しが効かないですから、ここは最大限想定できる限りの状況はクリアできるように考えるべきだろうと思うんですが。

事務局：例えば、これは1枚の大きな壁ではなくて真ん中に2枚のパネルを付けると、その内の1枚が部屋の半分を隠せる壁にもなるという考え方はあると思いますので、また設計者と相談して予算と、真ん中にレールを入れた場合のライトの位置がどうなるかを調整します。

後 藤：この動かせる壁というのは20mくらいの壁がドドッと動くわけですよ。

事務局：そうですね、13mぐらいの。

後 藤：これを見ると8m80cm・8m80cmの壁がくるから約20m？

事務局：16mぐらいですかね。2人で動かします。

事務局：上で吊るしてあって、最終的にその位置にくると下で固定します。

後 藤：設計がしっかりしているから動かなくなるってことはないと思うけれど。

菊 地：長年だと引っかかることは考えなくて大丈夫ですか。少し検討してみたいかがでしょうか。

事務局：はい、わかりました。

菊 地：一番最後のページで壁付展示ケースは動かないからいい。ハイケース・センターケース・ローケース・行灯ケースについては展示に使うときはどこに片付けますか？

事務局：上に「展示準備室1」というのがありまして、そこに収納します。

原：展示準備室は少ないよね。

事務局：そうなんです。ここがケースで埋まってしまいます。

後 藤：ケースは免震を使うんですか？

事務局：免震にはないっていません。この後最後に展示ケースについてご協議いただきたいと思っております。この続きで「当日配布資料4」に壁付ケースのイラストが載っています。この展示ケースも今回の設計の中で仕様を固めていくこととなりますが、現在課題に思っているところが「このウォールケースの展示品の高さをどのくらいに設定するのか」ということで仕様も変わってくるのではないかと思います。現在は展示ケースの床面をだいたい床から50cmぐらいの高さに設定して、その上に20cmの台を置いて床から70cmのところ展示物を置くという設定で考えています。

まず、展示品の高さが1点と、もう1つは現在の設計では下からの照明の装置を設定しておりません。展示物を20cmの台の上に置くときに

下部照明が必要になってくるのかも悩んでいるところです。

ウォールケースについて、その2点についてご意見をいただければと思います。

菊 地：いかがでしょうか。

原：下部照明はあった方がいいことは確かだと思います。ものによって本当に違うから。

事務局：わかりました。最近のウォールケースってだいぶ低いというか床からほんの少し立ち上がったところで、あとは展示台で高さをというものなんですけど、担当レベルで話をしていた中で、例えば、20cmってものすごく低く感じてしまって、見ながら落ち着かない感じがあったものから50cmを展示ケースの床面にしてはどうかと考えていまして、一応展示予定資料の掛軸を見てもその高さに設定しても一応全部入るようにはなっています。

原：展示物のサイコロはどれくらい要るか。ケースがこれだけ長いと相当用意しておかないと。その度ものに合せて作っていかないと厳しいかなど。最初から既製品を作っておいてもいいけれども、やっぱり借りたものとか展示するもので作っていかないと厳しいかなど。最初から20cmよりも50cmの床高さで作るということですか？

事務局：はい。

原：それはどうなんですかね。

菊 地：ローケース床の高さを20cmにしたときローケースの高さはどのくらいに想定していますか。

事務局：ガラス面が2m70cmくらいまでです。

菊 地：それだけないと収まらないものを展示するということを想定しているわけですね。

事務局：はい。床面が50cmになるとその分ガラス面が少なくなって2m20cmくらいになるんですが、いま予定している展示資料の中ではそれを超えるものはなく十分展示できると考えています。

菊 地：それは常設展示ではなくて特別展に使うものですか？

事務局：そうですね・・・。

菊 地：壁付のハイケースはどのくらいの高さにしたんですか。

事務局：4m弱です。

菊 地：天井高との関係でローケースといっているものも、天井がある程度変わってくる。圧迫があるようでも困りますし。さっきもご自分でおっしゃってたけど、高いところを見上げるというのは展示室の中ではあまりあれですね。あまり低いと見るのも容易じゃないし。20cm、50cm両パターン作れば一番いいんですけど。はっきりしているのは照明はあった方がいいでしょうということだと思います。

事務局：はい。

原：企画展示室は何を展示するのかが分からないからね。

木下：照明の設置をしておくそれが障害になってしまうケースもありますので付けられるようにしておくという手もありますよね。

菊地：ケースも床下から直接コンセントがあって電源が取れて必要なときだけ付けられるという装置でもいいと思うんですけどね。

ほかにご意見ございますでしょうか。

事務局：それと展示ケースに関しまして、文化庁の方から地震の時に動くよりはなるべく固定されていた方がいいという指導をいただいています。そのためにはどうするかということで、なるべく重心を下げて揺れ幅が少ないような工夫をしてくださいというお話をいただいていますので、今回の設計の中で、例えば、のぞきケースや独立の行灯ケースに重りのようなものを下に埋め込むことができないかという形で協議していきたいと考えています。

菊地：そうすると、さっきの床材の話になるんですが、阪神淡路地震のときに神戸市博物館が床が滑るやつは割れて、結局普通に動かない方が残ったんです。なので、少しその辺のことも、文化庁からそのような指導があるのであれば、免震台はとにかく最終的にはテグスで留めないといけないなど。横揺れなんかも免震で吸収してくれるんですけど縦揺れはダメなんです。そこは文化庁のあれを上手く使って、あまり揺れない、動かないものを考えればいいのではないかと思います。

事務局：はい、ありがとうございました。

菊地：これ以外に何かありましたら。

事務局：以上です。

後藤：免震台というのはかなりたくさん入っているんですか。

菊地：免震台よりも、むしろ免震装置で建物全体の垂心を図ろうというものがきています。九博も最初は免震装置を付ける予定は無かったんですが、途中でやっぱり入れた方がいいだろうということで費用もだいぶ変わったんですが、入れた記憶があります。

ほかになければ、よろしいでしょうか。

ありがとうございました。いろいろな意見が出たと思いますので、少しそれを検討して実施設計にまとめていただければと思います。

司会：以上をもちまして「第7回松本市基幹博物館建設検討委員会展示専門部会」を閉じたいと思います。本日はありがとうございました。